慢性腎臓病重症化予防に向けた
セルフモニタリングシステムの開発

看護学部

○准教授 大江理英（おおえりえ）、竹澤一憲（たけざわかずのり）、講師 築田誠（つくだまこと）、准教授 小野博史（おのひろし）、
准教授 大村佳代子（おおむらかよこ）、教授 上村浩一（うえむらひろかず）、教授 森菊子（もりきくこ）

キーワード 慢性腎臓病、重症化予防、セルフモニタリング

研究概要

研究背景：慢性腎臓病（Chronic Kidney Disease: CKD）は「沈黙の臓器」といわれる腎臓の機能が持続的に低下する疾患で、糖尿病性腎症などさまざまな腎臓病を包括した総称である。CKD は高血圧や加齢による腎機能の低下が原因で、CKD により透析を受ける患者は増加傾向にあり、医療費を逼迫している。しかし、CKD は自覚症状が乏しいため国民の認知度は低く、臨床でも見過ごされがちで、十分な対応がなされているとは言い難い。CKD 患者の透析移行を回避するには、高血圧が CKD の悪化要因となるため降圧効果がある減塩支援が重要となる。したがって、今回は CKD 重症化予防につながるセルフモニタリングシステム開発に向けた看護支援プログラム(以下、支援プログラム)の効果を検討した。

研究方法：準実験研究。外来通院中の CKD 重症度分類 G1～G3b の 60 歳以上で、減塩が必要なものを対象者とした。支援プログラムは、患者が血圧測定を通して、血圧と療養生活の関係に気づくことを促し、療養生活での減塩に取り組む力が高まることを目標に作成した。

介入方法： 6 ヵ月の期間に、1～2 ヶ月ごとの外来受診時に 1 回目は約 45 分、2 回目以降は約 30 分実施した。支援プログラムの枠組みを図 1 に示す。

図 1 ： 支 援 プ ロ グ ラ ム

結果：対象者は 10 名。平均年齢 75.6 歳。腎機能が悪化した対象者はなく、支援プログラムにより塩分摂取量を控えることへの意識づけが高まり、塩分の多い食事の摂取量や回数が減少し、醤油をかけすぎないという行動の変化が生じていた。

考察：支援プログラムによる介入により CKD 患者の減塩行動を促進させる傾向が確認された。また、CKD 患者の腎機能の維持に関する効果も期待されるため、今後はさらに長期間の検討を予定している。

アピールポイント

国民ニーズの高いＣＫＤ患者へのウェアラブルデバイスの開発や健康管理をサポートするセルフモニタリングシステムの開発の可能性：本研究は、国民ニーズの高い CKD 患者の重症化を予防し、透析移行を回避するために必要とされるセルフモニタリング能力を高める支援に関する実装研究である。CKD 患者のセルフモニタリング能力を高め、減塩行動を支援する**ウェアラブルデバイスやセルフモニタリングシステムの開発は、国民の健康を守るだけではなく医療費増大の解決に貢献できる。**